Doctor's VOICE
SPECIAL INTERVIEW

Dr.Shinozuka

埼玉医科大学
医学部 消化器一般外科 診療部長・教授

篠塚 望

「医師は素晴らしい職業」という想いを胸に。

臨床と教育に携わり これからの医療人を育てる。

救急医療を支える 大学病院にあって 地域に貢献することを使命とする

埼玉医科大学のキャンパスを抱くような、緑豊かな丘陵地を窓から一望する会議室で「あまりストレスは溜めない方ですね」と柔和に微笑みながら語る篠塚教授。しかしその言葉の端々からは、多くの責任を双肩に担う多忙な日常が窺える。医学部では主に5・6年次の国家試験対策の責任者を務め、大学病院では副院長、そして消化器一般外科の臨床医として患者さんの治療と後進の指導に当たっている。同科にはすでに経験豊かな医師たちが日々の治療を担っているが、その中で管理の職にある篠塚教授もまた、現在も自ら手術の場に立つことがある。

消化器一般外科では、篠塚教授が専門分野とする胆道系の内視鏡手術だけでなく、急性腹症（腹部に激しい痛みを伴う急性疾

外来患者さんの診察

患の総称）といった緊急を要する消化器系の手術全般に対応している。ゆえに昼夜を問わず、緊急の手術を要する周辺地域の患者さんがここに搬送される。

「大学病院は最後の砦なんです」という教授。「この地域で、夜中も緊急手術ができるのはこの病院だけです。その昔『第一外科』の頃からのモットーとして、患者さんは断らない。そうした使命感は私が師事した教授からたたき込まれてきました」

その言葉を裏付けるように、取材の間にも教授の元に緊急手術を要する患者さん受け入れを知らせる電話が入っていた。

厳しさを知りながらも あえて選んだ外科医の道で 医療全般を見通す

篠塚教授が医師になることをめざした背景には、それぞれに開業医を営んでいた両親の影響があった。ただし医者になることを両親から求められたわけではない。高校時代、それまで打ち込んでいた卓球から受験勉強にシフト、やがて予備校の寮に入ったところから本気の勉強がスタートしたという。「反発もありましたが、応えようという気持ちもどこかにありましたね」と教授は当時を思い返す。

そして埼玉医科大学へと進学し、外科医という道も、ギリギリまで考えて選んだものだという。「当時の第一外科は、今と違ってとにかく忙しいところで、ほとんど毎日、病院に当直しているような具合でした。しかしいずれやるなら、大変であまり他の人が選ばないようなところでやってみたいと。正直、大学時代はそれほど勉強熱心ではなかったので、このままではいけないという気持ちもありましたね。まわりの人には、あいつが第一外科に行った、と驚かれましたよ（笑）」

その道で多くの時を重ねた教授だが、消化器外科という領域を特別に強く意識することはないと語る。

「外科というと多くの人は手術というイメージが強いかもしれません。しかし手技は訓練を積めばできるようになるものであり、手術は一連の治療のあくまで一部分を担うものです。がん末期や良性疾患など手術をしないという選択が必要な場合もあり、また患者さんの状態によってはどんな手術をするべきかから考える必要もあります。大切なのはその前後に、ご家族と信頼関係を築くことです。通常は手術が上手くいけばあとは患者さんの治癒力で治っていくものですが、術後には合併症の危険性もあり、また治療が長期に及ぶこともあります。そうしたときにご家族としっかりコミュニケーションを取って、いかに信頼関係を築けるか。難しいことですが、それが大事です」

患者さんとその家族を第一に考える視点がそこにあった。

ゼロからのスタートだった 留学経験で身につけた 困難を乗り越える力

篠塚教授にとってターニングポイントのひとつとなったのが、研究のためのアメリカ留学を経験したことだった。卒業後、母校で外科に所属して7年ほどが経過してもたらされたその話を、初めは迷い、悩んだという。「ずっと臨床に携わってきて、本格的な研究に関わるのはそれが初めてでした。子どもができたばかりだったということもありましたし」

それでも、同科の先輩方が受け継いできた留学だったこともあり、悩んだ末に渡米を決意した。しかし当初は苦難の連続だったという。

外科手術は一連の治療の一部。大事なのはその前後にご家族としっかりコミュニケーションを取ること。

Dr. Nozomi Shinozuka

臨床実習の学生を交えたカンファレンス

留学先で篠塚教授にもたらされた移植と人工血管という2つの研究テーマは、いずれも「渡米してから初めて知らされた」という当時全く新しいもの。しかも日本にいるときとは異なり研究のアポイントから全て自分自身で手配する必要があった。周りはほとんどが見知らぬ外国人の研究者であり、自分から積極的に話しかけなければ、誰からも知識を得ることができない。教授は自分自身でゼロから勉強を始め、少しずつ深めながら研究を軌道に乗せるまで半年あまりを要した。

「研究が軌道に乗ってからは楽しかったですし、家族ぐるみで付き合える友人もできました。1年9ヶ月ほどの留学でしたが、もともと積極的に動くことが不得手だった自分にとって、とても良い経験になりました。あの留学を経験したおかげで、日本に帰ってから多少大変なことがあっても対応できる力がつきました。良い場を与えてもらえたことを非常に感謝しています」

国家試験対策の責任者として教育のあるべきカタチを試行錯誤する日々

そうした臨床医としてのキャリアの一方、現在の教授は国家試験対策の責任者として大学5･6年生の指導に当たっている。「医師の国家試験はますます高度化しています。その対策として多くの私学では、予備校講師の招聘やオンライン講座の活用などに取り組み、埼玉医科大学でも試験対策の合宿を行なっています」

高度化する国家試験への対応が急務であることは篠塚教授の言葉の端々にうかがえる。臨床での学びと試験対策の学びはいずれも大切なものだが、その内容が必ずしも一致するとは言えない。そのため教員にも勉強が必要であり、医師としてのみならず教員としてどこまで学生から信頼されるかが大事だと教授は語る。

授業内容やカリキュラムへの要望が学生の側から上がることもある。篠塚教授はそうした声にも耳を傾けつつ、その頭の中では医大における教育のあるべきカタチが模索され続けている。

かけがえのない大学生活を謳歌しつつ勉強のレベルアップに挑んでほしい

篠塚教授は大学生時代、勉強とともに卓球のクラブ活動に打ち込んでいた。東日本医科学生総合体育大会で団体優勝、医科歯科卓球大会ではダブルスで優勝という実績からも、本気で取り組んでいたことがうかがえる。もともとスポーツを見るのも、からだを動かすのも大好きで、今でも毎日の腹筋やスクワットを欠かさない。

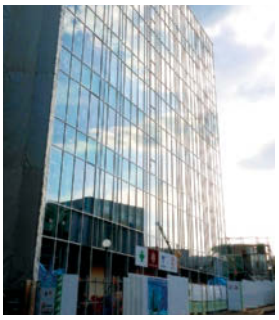
医科大学での学修内容は教授の学生時代に比べ、質は高まりボリュームも増しているという。

「ひとつの学年に百数十人という学生がいますが、話をすれば一人ひとりみんな違います。どこに楽しみを求めるにせよ、かけがえのない大学時代を謳歌してもらいたいと思っていますが、一方で勉強も一生懸命にしないといけない。特に国家試験を前にする5･6年次は、どの大学の学生も医師をめざして勉強します。試験に挑むためには、負けないように勉強のレベルをあげていく必要があります」

臨床の場と教育の場。そのいずれにも深く関わりながら、教授の目は厳しく、優しく、これからの医療人となる学生たちを見守っている。

医師は素晴らしい職業。学生にはそれぞれに大学生活を謳歌しつつ、勉強を頑張ってもらいたい。

最新設備を備えた学生の講義室「オルコスホール」



新築の教育実習棟。臨床能力を高めるための、スキルスラボやトレーニングセンターなどを設備

Doctor's VOICE SPECIAL INTERVIEW

Dr. Nozomi Shinozuka